

2015年度
事業計画書

2015年4月 1日から
2016年3月31日まで

公益財団法人 国際文化会館

I. 知的対話プログラム

21世紀に入り、より複雑化してきた諸課題を見据え、異なる文化・社会的背景や研究者、ジャーナリスト、NGO/NPOのリーダー、作家、芸術家といった細分化された専門を超え、人文・社会・自然科学の諸分野をつなぐような思索と対話の場を創出し、領域横断的かつ複眼的、重層的な知的ネットワークの形成を図る。

1. アジア・リーダーシップ・フェロー・プログラム (ALFP)

会館の中核プログラムの一つであるALFPは、1996年度より独立行政法人国際交流基金との共催により、これまでに、アジア諸国のさまざまな分野で活躍する知識人109名を招聘してきた。滞日中のフェローたちは、会館で寝食を共にし、アジア地域や世界に共通する諸課題について議論する知的共同作業に参加する。このような知的対話を通じて、地域内ならびにトランスナショナルな理解と協力を促進し、アジアのパブリック・インテレクチュアルおよび日本のカウンターパートとの緊密なネットワーク構築をめざす。

2015年度は、8～9名のフェローをアジア数カ国から招聘する。2015年度より国際交流基金の本プログラム担当部署が、アセアン諸国との交流を中心とするアジアセンターに移管となることを受け、これまでよりも東南アジアからの招聘者を増加する予定である。

2. 牛場記念フェローシップ

現代の複雑化した国際情勢を読み解き、時代の一步先を見据える世界的なオピニオン・リーダーを招聘し、グローバル社会が直面する諸課題について意見交換を行うことにより、日本と諸外国との相互理解の増進を試みる。滞日中のフェローは、公開講演会と専門家を中心としたセミナー、ワークショップなどに講師として参加するほか、各フェローの希望に応じて非公式な対談やディスカッションの機会を設定する。

2015年度は、2014年度に選出された、ターリック・ラマダーン氏(オクスフォード大学教授)の招聘を目指す他、2016年度に招聘するフェローを選出する。本フェローシップは、牛場信彦記念財団の残余財産の寄贈により実施している。

3. 日印対話事業 (Japan-India Distinguished Visitors Program)

日印平和条約締結から60年を迎えた2012年、日印両国が主軸となり、アジア・太平洋の安定と平和を築くための対話の「場」を創出するため、会館と独立行政法人国際交流基金が共同で立ち上げた新たな人物招聘事業。

本プログラムでは、社会のさまざまな問題の解決に向けて、現状を打破するための新しい価値やアイデアを提案している、インド国内で影響力のある人物を、政治・経済・文化・学術・科学など幅広い分野から、年間1～2名、一週間程度日本に招聘する。フェローは、講演会、関連機関の訪問などを通して日本の関係者と意見交換やネットワーク構築を行う。

2015年度も、1～2名のフェローを招聘する予定である。

4. 日米国際金融シンポジウム

ハーバード・ロースクール国際金融システム・プログラム(PIFS)との共催により、日米国際金融シンポジウム「21世紀金融システムの構築：日本と米国にとっての課題」を開催している。本シンポジウムは毎年日米交互で開催され、日米両国の政府高官、政治家、金融機関幹部、シンクタンク研究者、法律家、

コンサルタント、研究者、メディア代表者など 120 名以上が参加して、2 日間にわたって国際金融システムの機能と安定化にかかわる問題についてオフレコの討議を行う。

2015 年度は、秋に、米国で第 18 回目となるシンポジウムを開催する予定である。

II. 人材育成プログラム

創造的な知的対話を行うためには、自己の社会や文化の基盤の上に立ち、広く総合的な視野を身につけた主体的な対話能力を持つ人材が必要である。こうした人材の発掘と育成に資する、効果的で地道なプログラムを行う。

1. 新渡戸国際塾

国内外の国際的な現場で活躍できる人材の育成を目的に開催する少人数制の塾で、対象は、社会人経験が最低 5 年あり、40 歳以下の人々。塾長は明石康(国際文化会館理事長)、コーディネーターには渡辺靖氏(慶應義塾大学 SFC 教授)を迎え、第八期は 2015 年 6 月から 12 月まで、全 14 回の講義を行い、そのうち 7 回は公開講演とする予定である。本塾は主として週末に開催し、各回の構成は、講義と質疑応答(90 分)ならびに講師と塾生との自由討論(140 分)となっている。15 名の塾生は、書類選考(願書・小論文)および面接により選考される。

本プログラムは、公益財団法人渋沢栄一記念財団、一般財団法人 MRA ハウスの助成を受けて実施する予定である。

2. 日米芸術家交換プログラム(日米友好基金 ほか)

毎年米国の芸術家5名が来日して、日本文化・芸術の研究および創作活動に従事し、また日本の芸術家との交流を深めるプログラムであり、全米芸術基金(US National Endowment for the Arts)、文化庁の協力のもと、日米友好基金(Japan-United States Friendship Commission)が主催している。会館は1978年のプログラム開始時より、来日時のオリエンテーションや住居の手配、日本人芸術家や関連団体などへの紹介、情報の提供や通訳など、滞日中の活動全般にわたるサポートを行っている。

2015年度は、以下の5名のアーティストが選出された。フェローの活動や日本人芸術家とのコラボレーションの発表は、例年通りIHJアーティスト・フォーラム(助成:日米友好基金)として開催する。加えて、2015年度は日米友好基金の40周年にあたるため、来日するアーティストと日本人芸術家とのコラボレーションなどをより促進する予定である。

ジュリアン・バーネット Julian-Alexander Barnett (振付家)

ケイティ・サコーン Katie Cercone (インターディシプリナリー・ビジュアル・アーティスト)

ジョージ・フェランデイ Geroge Ferrandi(ビジュアル&パフォーマンス・アーティスト)

ポール・キクチ Paul Kikuchi (作曲家)

モニク・トゥルン Monique Truong (小説家)

III. パブリック・プログラムならびに出版

知的交流の成果を広く一般に共有し、国際理解を進める基盤を強化するため、さまざまな形のパブリック・プログラムの開催や、出版を含めた情報の発信を行う。

1. アイハウス・パブリック・プログラム

(1) 戦後70周年記念プログラム

戦後70周年を迎える2015年を機に、会館では連続シンポジウムを全4回開催し、内外の多様な分野、地域の有識者の視点から戦後の日本のあり方を問い直しつつ、これからの日本について世界と共に考える。国際文化会館、国際交流基金、日米友好基金、マンスフィールド財団による共催を予定。

(2) アイハウス・ランチタイム・レクチャー

第一線で活躍中のさまざまな分野の専門家を招き、タイムリーなテーマについて解説していただく内容の講演会を開催する。

2015年度は、3～4回の講演会を開催する予定である。

(3) 日本理解プログラム

① japan@ihj

「日本理解の増進」を共通項に、情報交換・発信および国境・職業・分野を超えた相互交流の場となるフォーラムで、会館がこれまで築いてきた内外の専門家の協力のもとに、政治、経済、外交、社会、文化など、幅広いテーマを実施する。いずれの講演も、基本的には通訳をつけずに英語で行うことが特徴となっている。

2015年度は、2～3回の講演会を開催する予定である。なお、本プログラムはこれまで参加費無料で実施していたが、受益者負担の観点から、2015年度からは有料とする(但し、本プログラムの主たるターゲットである外国人には特別料金を適用し、また、会員は引き続き無料とする)。

② アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター・レクチャー・シリーズ

本シリーズは、日本研究者の研究成果を広く一般の方々に公開すること、また、未来の日本研究者と既に幅広く活躍する日本研究者とのネットワーキングを図ることを目的として2014年度より国際文化会館、日本財団、アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター(IUC)の共催事業として開催している。講師には各界で活躍するIUCの卒業生を迎えており、用語は日本語。

2015年度は、2回の講演会を開催する予定である。

③ 日文研—アイハウス連携フォーラム

京都を拠点に活動する国際日本文化研究センター(日文研)との共催プログラム。本フォーラムでは、日文研の専任・客員研究員を講師とした講演会やセミナー(用語は日本語または英語)を会館で実施する。また、会館が海外からフェローを招聘した場合には、日文研との共催で京都での講演会開催も企画している。

2015年度は、4回程度共同プログラムを実施する予定である。講師は日本人または外国人で、用語は日本語または英語。

④ 日本文化講座 *Delve into Japanese Culture @ I-House*

東京を拠点に、訪日や滞日外国人向けに日本語や日本文化講座を開催している(有)Kisako

Intercultural Instituteとの共催で2014年度から実施している、日本文化を英語で紹介する講座。各回日本文化についてさまざまな切り口(日本庭園、歌舞伎、墨絵など)からの講座を行うことで、外国人宿泊者や海外から会館を訪れる方に日本文化に対する理解を深めていただくと同時に、広く日本人の方にも会館に足を運んでいただくことを目指す。

2015年度は、3回程度の講座を開催する予定である。本プログラムは有料(2,000円)であるが、会館の宿泊者は無料としている。

(4) その他

東京国際文芸フェスティバル

公益財団法人日本財団が 2012 年度から始めた「東京国際文芸フェスティバル」は、東京をニューヨーク、ロンドン、パリと並ぶ世界の文芸の拠点のひとつとして位置づけるため、海外の作家や作品を日本国内に紹介するとともに、日本の文学・文化を世界にアピールする場としてさまざまなプログラムを行っている(2014 年度は休止)。

会館は、本フェスティバルの中で行われるプログラムのうち、日本理解の促進など、会館のミッションに合致するテーマを扱うものへの協力を行っている。2015 年度は 2013 年度同様、会館を会場として、一部のセッションを共催する予定である。

上記に加え、時宜を得たテーマを扱ったパネル・ディスカッションや、海外からの来日が急ぎよ決まった知識人による講演会などを随時開催する。

2. 出版

(1) 公益信託長銀国際ライブラリー

2000 年 7 月に設定された、「公益信託長銀国際ライブラリー基金」(前身である長銀国際ライブラリー財団の残余財産を基金として事業を継承)による事業で、会館は本事業の受託者である。政治・経済・社会・文化などの日本人著作を毎年 2 冊選定し、英訳・刊行して広く内外に配布し、日本理解の増進に資することを目的としている。

2015 年度は、以下の英語翻訳版を刊行し、内外の大学図書館、研究機関、公共図書館、文化施設など、海外 2,800 カ所、国内 700 カ所への無償配布の実施を予定している。

今橋理子著『秋田蘭画の近代:小田野直武「不忍池図」を読む』(東京大学出版会、2009 年刊)
A New Reading of Odano Naotake's "Shinobazunoike-zu": The Akita Ranga School and the Cultural Context in Tokugawa Japan [tentative] by Imahashi Riko
翻訳者: Ruth S. McCreery

熊谷奈緒子著『慰安婦問題』(筑摩書房、2014 年刊)
The Issue of the Comfort Women: The Japanese Responsibility and the Quest for Reconciliation (tentative) by Kumagai Naoko
翻訳者: David Noble

佐藤弘夫著『ヒトガミ信仰の系譜』(岩田書院、2012 年刊)
Deification in Japan: A Historical Inquiry [tentative] by Sato Hiroo
翻訳者: David Noble

(2) アイハウス・プレス

2006年より、出版メディアを通して、会館のプログラム活動の成果を広く一般に発信するとともに、海外における日本理解の増進を目的として、日本人による名著を英訳・刊行して発信する活動を基本として実施している。

2015年度は、次の2冊の書籍を刊行し、内外の出版マーケットで有償配布する予定である。

国際文化会館新渡戸国際塾編
『新渡戸国際塾講義録 4』

川勝平太著 *The Lancashire Cotton Industry and Its Rivals (tentative) by Kawakatsu Heita*
『日本文明と近代西洋:「鎖国」再考』(日本放送出版協会、1991年刊)を全面改編して刊行。
翻訳兼編集者: Jean Connell Hoff

(3) 定期・不定期刊行物

2015年度は、年4回の広報誌『I-House Quarterly』(A4版、16ページ)を発行する予定である。同誌では、各界で活躍中の方々へのインタビュー／対談ほか、会館の講演レポート、今後のプログラム案内、施設紹介などを掲載しているが、その目的は会館を知らない人々、とりわけ若い世代にも気軽に冊子を手にとってもらい、会館へ実際に足を運んでもらうことである。そうした観点から、ターゲットとなる読者層の意見などを参考に、継続的に内容の充実を図っていく。なお、ウェブサイトでは講演サマリーや動画、会員専用サイトではさらに長文の講義録や全編動画を掲載するなど、ウェブと紙媒体の情報量をすみ分け、効果的な連動を目指す。また、2014年度の事業内容をまとめた年次報告書(『国際文化会館の歩み』、Annual Report)を刊行し、会員に送付する予定である。

IV. 調査研究プロジェクト

1. 外交問題夕食懇談会

毎回ゲストスピーカーを迎え、外交問題に造詣の深い人々が、インフォーマルな雰囲気の中で、オフレコで議論する懇談会である。用語は日本語または英語で、いずれも通訳はつけずに行う。

2015年度は、4～5回の実施を予定している。

2. アーカイブ化準備

会館には、写真、事務文書、各種の記録など、戦後の文化交流史を語る一次資料として、アーカイブ保存すべき資料が多くある。これらに加えて保存が期待されるものに、会館の歴史を知る人々が語るオーラル・ヒストリーがある。将来的に、オーラル・ヒストリーも含めた総合的なアーカイブ化をするため、2015年度より、専門家・研究者の方々への意見聴取を開始する。

V. 図書室

日本研究の専門図書室として、国内外の日本専門家などと国際文化会館をつなぐ役割を担っている。

蔵書は日本に関する英文学術資料(主として人文・社会科学)、国際関係に関する専門資料、国際文化会館に係る出版物など、書籍約 27,000 冊、雑誌約 430 タイトル、電子ジャーナル 18 タイトル、新聞 6 紙である。サービスは主に国際文化会館の会員、図書会員、宿泊者、他図書館からの紹介による利用者に対して行っている。サービス内容はレファレンス・サービス、レフェラル・サービス、資料貸出、他図書館との相互貸借および紹介状の発行などである。

2015 年度は、上記の業務のほかに朗読会(年 5 回)と書籍小展示(年 2 回/日仏会館図書室、ドイツ-日本研究所と共同実施)を開催し、会員のみならず広く一般に向けて図書室を広報する予定である。

以上